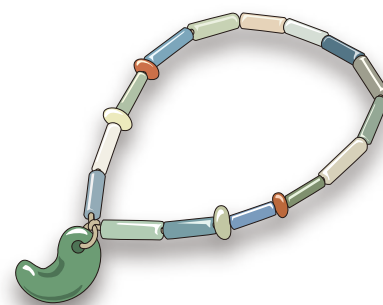




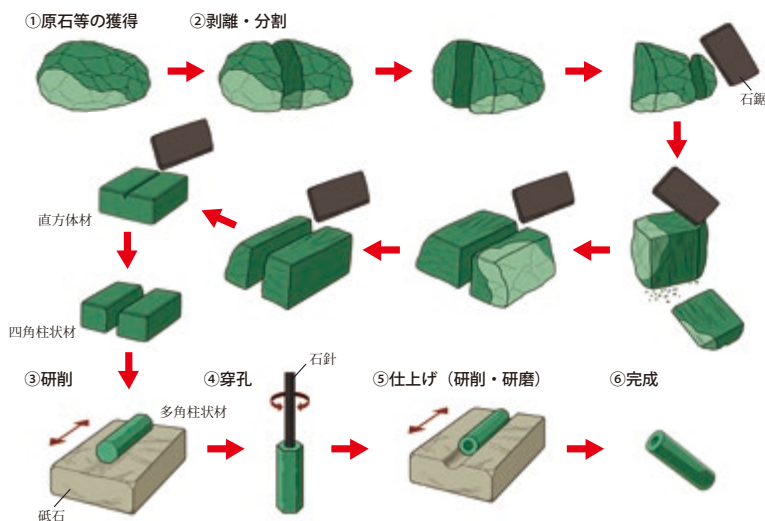
玉作り関連資料



まがたま
勾玉



勾玉・管玉とも、穴に糸を通し、首飾りや腕飾りとして使われた。



青谷上寺地遺跡の管玉の作り方
～大中の湖技法～

石鋸で溝をつけて石を割る「施溝分割」によって、原石から直方体材、次いで四角柱材を作り出し、角を磨き落として管玉に仕上げる作り方。大中の湖南遺跡（滋賀県）のほか、北陸～近畿～山陰にかけての広い地域に広まった。青谷上寺地遺跡は大中の湖技法を用いる最も西の遺跡。



①玉と鉄を巡る交易

青谷上寺地遺跡では木器、石器、骨角器等の製作途中品が出土しており、「ものづくり」が盛んに行われていたことがわかるが、交易拠点として発展するうえで大きな意味を持ったのは「玉作り」である。弥生時代中期以降、石川県小松市菩提産と考えられる碧玉の原石が持ち込まれ、「大中の湖技法」と呼ばれる作り方で行われた。北陸地方からは、翡翠（新潟県糸魚川産）製の勾玉ももたらされている。

この時期、北部九州の有力者の墓である甕棺墓には、北陸産碧玉製の管玉が多数副葬されており、青谷上寺地遺跡から北部九州へ運ばれた可能性も充分考えられる。

恐らく青谷上寺地遺跡の弥生人は、北部九州の有力者層が求めた管玉と引き換えに、海を越えてもたらされた貴重品である「鉄」を手に入れたのではないだろうか。弥生時代中期以降、中国東北部で製作された「铸造鉄斧」が日本列島に流入し、弥生人はその破片を研いで工具として再利用した。青谷上寺地遺跡にも、山陰で最も早い中期前葉に铸造鉄斧